

話題17 「21世紀の森」はこれでよかったのか

‘自然’を、そして‘人’を大切に作る街づくりを

「光陰矢のごとし」。「矢」では表現できないほどに「時」にはスピードを増し、しかも複雑な展開を見せて過ぎていく。市民の、県民の願いとは全く異なる方向へと。

警察官であった父親が、40歳の若さで殉職。母親は、5人の子供を女手一つで育て上げ、100歳で天に帰った。やんばるの農家で、必死に走った苦難の生涯の途上、一度だけ泣いたことがあるとの思い出を語ったことがあった。

野球少年であった私は、中学1年生の春、対外試合に出かけた。三塁からホームへすべりこんだ際に、ジャンプした相手チームの捕手がスパイクもろとも私の右腕に落下し骨折した。引率の先生のオートバイにゆられ、名護の町の病院で治療を受けた。

右腕は、約1カ月の間ギブスで固定され、左手での生活であった。母親の話である。「治療の間、一度も‘痛い’という言葉はなかった。ただ、‘治療費のことで、また心配かけるね’」という息子の言葉に、隠れて、泣いたとのことであった。

もう一つの貧乏物語がある。過去の随想にも書いたが、経済的に大学進学は不可能な状況にあった。しかし、戦後の沖縄の‘国費国内留学制度’に救われた。名護高校三年、現役での入試の一次試験に合格、二次試験に失敗。二次試験の失敗に、母親はホッとしたとのことであった。学費の工面ができなかった。

当然のこととして、受験のための予備校へはいけない。そのような発想すら湧かなかった。幸いにも、名護の町は自然と人に恵まれていた。午前中は町立の図書館で、午後からは海辺の琉米文化会館で勉強することができた。疲れを癒し、気分の転換には、名護湾の砂浜は格好の場であった。大きな、真っ赤な夕陽を映し出す穏やかな海。水平線。名護城（ナングスク）からの眺望もまた、若者に夢を見させるには充分過ぎるものがあった。

名護湾にも高度経済成長の余波が押し寄せ、‘21世紀の森’が築かれた。長・・・い砂浜が消え、シャッター街と化した新たな街ができた。街づくりには、50年、100年の計が必要であろう。‘自然’を、そして‘人’を大切にすることを基本に置いた、景気の波に左右されない地道な街づくりを目指すべきではないだろうか。

こよなく名護の街を愛する、団塊の世代のつぶやきである。あの名護湾の砂浜は、永遠に戻らない。埋め立ててはいけない。夢と希望を抱かせる青い海は。